

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

♪ 22

台湾・台北



2019年、私のヨーロッパでの活動はピークを迎え、隔月で国境を超えていた。大陸に降り立つと、人のつながりが葉脈のように広がり、その先に新しい仕事やチャンスが待っていた。2020年2月、拠点をヨーロッパに移すべく、パリにアパルトマンを探しに行った。そのままスペイン、オーストリアと仕事でまわったが、帰国すると同時に、コロナ禍が日本にも襲いかかった。

すぐさま国境は固く閉ざされ、ほぼ鎖国状態となった。島国の日本は歩むべき新しい道を模索し始めたものの、今なお試行錯誤の過程にあるように思える。音楽業界もずいぶん様変わりしたが、私自身は悩み抜いた結果、大阪音楽大学で准教授の職を得て、本年度から新しい生活を始めた。4代も半ばに差しかかり、新しい環境で一からスタートすることは容易では

縁深い地、誓った再訪

ないが、人間関係がこれ以上恵まれた職場は望めないと思う。コロナ禍がなければ今ごろはパリの凱旋門が行動のハブになっていたところ、週の半分は阪急の満員電車で揺られている。人生はなかなか面白い。

本連載はこれまでヨーロッパが舞台だったが、私の音楽活動はアジアにも及び、中でも台湾は縁が深い。台北を初めて訪れてから20年が過ぎた。

イタリアの国際コンクールの出場権をかけたアジア大会で優勝

し、国家音楽廳をはじめ台北を代表するホールで演奏したのが02年。以来、台北でも応援者が増え、幾度となく滞在した。大きな地震にも遭遇したし、士林夜市で食あたりを起こしたこともあった。

17年の訪台は久しぶりの台北公

演だった。カシオ計算機株式会社のアンバサダーに就任して初めての海外公演で、台湾の音楽界をけん引する若き天才・謝世嫻さんとの共演が実現した。彼女は今日ニューヨークを拠点にしている。映画界と強いネットワークを持つ彼女の才能と発信力のすごさは、私にとって大きな刺激となった。終演後の撮影会は長蛇の列で、台湾と日本の雑誌からもインタビュを受け、半年後に再びコンサートを開催された。

この台北公演をきっかけに、アンバサダーとしての仕事はハンガリー、ポーランド、スペイン、イタリア、オーストリアでも展開された。いつも帯同してくれるマネージャーは、実は中学校時代からの親友で、ニューヨークのカーネギーホールと一緒に演奏した思い出を持つ。公演を終えてから台北101に昇った感動は忘れられず、それまで味わってきた途方もない辛酸が、人生における調味料のように思えた。



台北での公演「一鍵鐘琴 古典×跨界の対話」(2017年) (赤松林太郎さん提供) 台北101の89階展望台から夜景を望む

「また来よう！」と交わした約束は果たせていないが、コロナ禍もようやく出口が見え始め、次の旅の準備をする時が来た。

◇第2月曜に掲載します。



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。大阪音楽大准教授、洗足学園音楽大客員教授。神戸市在住。

